

ポストモダン思想とアドラー心理学

野田俊作 (大阪)

要旨

キーワード :

0. はじめに

《ポストモダン(postmodern)》という用語が最初に用いられたのは 1970 年代のなかばであるが、リオタール(Jean-François Lyotard)^[1]が 1979 年の著書『ポスト・モダンの条件 (La condition postmoderne)』の中で《大きな物語の終焉》と関係づけて《ポストモダン思想(post-modernism)》を語って以後、社会科学・人文科学の世界でセンセーショナルにとりあげられるようになった。大きな物語の終焉とは、理性・科学・進歩・真理など、西洋近代文明を支えてきた基本前提が有効性を失ってしまったという認識のことである。このような認識にもとづいて、ポストモダン思想は徹底した認識的相対主義を採用し、科学を含めたあらゆる知識を《神話》あるいは《物語》あるいは《社会的構築物》でしかないと考える。

臨床心理学もまた、ポストモダン思想に対する態度決定を迫られている。見渡すと、家族療法家はポストモダン思想を受け入れた人が多く、認知行動療法家はポストモダン思想を拒否している人が多く、解決志向的短期療法家はその中間あたりの人が多いように思う。アドレリアンはどうかというと、アメリカでは 1995 年ごろからポストモダン思想が話題になりはじめた。たとえば、1998 年の北米アドラー心理学会機関誌 The Journal of Individual Psychology^[2]はポストモダンの心理療法であるナラティブ・セラピーとアドラー心理学の比較を特集したし、2003 年にはワッツ(Richard E. Watts)^[3]らがアドラー心理学とポストモダン思想の一種である構築主義との比較論文集を刊行したし、同年に発行されたオバーストとスチュワート(Ursula E. Oberst and Alan E. Stewart)^[4]の教科書にはポストモダン思想とアドラー心理学の関係に関する章が設けられている。これらの文献のどれも、ポストモダン思想に全面降伏した立場から書かれているのではなく、各々の著者が、全面受容と絶対拒否の間のスペクトラムのどこかに自分の位置を定めて、ポストモダン思想と距離を保ちながら発言しているように思われる。それにしても、今やポストモダン思想を無視してアドラー心理学を語ることは難しくなってしまった。

本論では、このような流れをふまえつつ、私なりにアドラー心理学とポストモダン思想の関係について考えてみたい。さいわい、ポーキングホーン(Donald E. Polkinghorne)^[5]が、ポストモダン思想の特徴を以下のように簡潔にまとめてくれている。

- 1) 基底欠如性 (foundationlessness) : リアリティにたいして直接にアクセスできないために、知識を組み立てるための確実な認識論的基礎をもつことができない。

- 2) 知識の断片性 (fragmentariness) : 共通点のない要素や出来事が相互に無関係な断片として集積しているのが現実というものであり、したがって文脈自由な一般法則を求めることはできず、局所的で特異的な出来事にかかわる知識しか得ることができない。
- 3) 構築主義 (constructivism) : 知識はリアリティの鏡像的な反映ではなく、認知プロセスによって主観的に構築されたものである。
- 4) ネオ・プラグマティズム (neo-pragmatism) : 知識の有効性についての唯一の基準は目標に到達するために有益であるか否かだけであって、リアリティと対応しているかどうかではない。

以下、ポーキングホーンの4項目と関連させながら、面接・助言・診断・共同体感覚について、ポストモダン思想との関係で考察を加えてみたいと思う。

1. 基底欠如性

●客観世界は知りえない

ポーキングホーンがいう基底欠如性、すなわち「リアリティにたいして直接にアクセスできないために、知識を組み立てるための確実な認識論的基礎をもつことができない」という考え方、私なりに言い直すと「人は客観世界を知りえない」という考え方は、アドラー心理学を学んだ者にはきわめてなじみやすい認識法である。すなわち、「人は意味づけの世界に生きている」ということである。アドラー心理学ではこのような考え方を《認知論 (cognitive theory)》と呼んでいる。人間が知りうるのは「解釈された世界」であるにすぎず、「ほんとうの世界」ではない。

西洋近代文明は、これとは反対に、「人は客観世界を知りうる」ということを暗黙のうちに前提していた。もちろんそれには程度の差があって、観察したそのままが客観世界であるという《素朴実在論 (naive realism)》からはじまって、観察と理性 (= 推理と仮説検証) を組み合わせることによって世界の実像に迫れるとする《実証主義 (positivism)》を経て、言語の論理的な分析によって客観世界の認識が可能になると考える《論理実証主義 (logical positivism)》に至るまでのスペクトラムがある。いずれにしても、「人は客観世界を知りうる」という点では共通していて、ただそのためにどのような工夫と努力がいるかについての意見の相違があっただけである。しかし、ポストモダン思想は、「どのように工夫し努力しても、人は客観世界を知りえない」と考える。

もっとも、このように考えたのは、ポストモダン思想が最初ではない。たとえば、カント (Emmanuel Kant) は、認識された「現象」がそのまま客観世界であるわけではなく、その背後に現象を成り立たせる、それ自体は認識不可能な「もの自体 Ding an sich」というものがあると考えた。さらにフッサール (Edmund Husserl) の現象学は、「もの自体」という概念が思弁的であることを批判し、その存在を肯定も否定もしないで「かっこ入れ」したうえで、世界に向かう人間の意識のあり方に注目した。

ポストモダン思想の基底欠如性の概念は、カントやフッサールの主張を徹底させたものであり、そういう点では新しく考えられたものではない。ただ、カントやフッサールが西洋近代文明を補強することを目的にしていたのに対して、ポストモダン思想は、西洋近代文明を脱却するために、あらゆる局面に密かに忍び込んでいる実在論や実証主義を暴き出し糾弾することを目的にしている点が違っている。

ここで注意すべきは、カントもフッサールも、客観世界の存在を否定しているわけではないこ

とである。ただ、1) その存在を証明する手だてがないということ、2) 存在するとしても、それをそのままに知りうる手だてがないということ、を主張しているだけである。

「人は客観世界を知りえない」という基底欠如性を、「世界は存在しない。存在するのは自分の意識だけである」というように独我論(solipsism)的に曲解するならば、そこからたやすく自己中心主義が導き出せる。しかるに、俗流ポストモダン思想は、しばしば自己中心主義的な独我論に陥っている。これについてはバザーノ(Manu Bazzano)^[6]が、レヴィナスと仏教を援用しつつ、アドラー心理学の立場から批判を加えている。「ほんとうの世界を知ることができない」のであれば、世界が存在するかしないかを確かめる方法がないので、存在するとも言えないし、存在しないとも言えないはずである。「客観的世界」は、フッサール以来、現象学風に「かっこ入れ」されたままなのである。「人は意味づけの世界に生きている」あるいは「人は客観世界を知りえない」というのは、決して「客観世界は存在せず、ただ自己だけが存在する」ということではないのである。

●面接について

アドラーはカント哲学の影響下にあったので、「もの自体」という概念を認めていたと思われる。すなわち、客観世界は知りえないとしても、存在することは認めていたのである。アドラーの後継者には現象学の影響を受けた人たちが多く、客観世界の存在を肯定も否定もしないで「かっこ入れ」した上で、世界に向かう人間の意識の方に注目した。

その結果、アドラー心理学では、クライアントがおかれた客観的状況よりも、状況に対するクライアントの解釈に関心をもつ。たとえばクライアントが、「私の父は賢い(あるいは愚かな)人だった」と言っても、あるいは「私の母は私を愛して(あるいは憎んで)いた」と言っても、客観的に父なり母なりがどんな人であったかに関心をもたず、父や母に対するクライアントの主観的解釈にだけ関心をもつ。そのため、治療者は、客観的出来事を明らかにするための質問をせず、主観的解釈を明らかにするための質問をする傾向が強い。具体的にいうと、「どう感じましたか?」「どう考えましたか?」「それでどうしましたか?」「どうした方がよかったですか?」というような質問である。

しかし、これには程度差がある。たとえば、ドライカースは、客観的状況に関する質問をすることが多かった。それは、主観的信念と客観的事実とを対比させ、信念が事実と矛盾していることをクライアントに示すためであった。彼の治療は、私が言う「グランドデザイン2」の形を取ることが多く^[7]、問題除去的であり正対的であった。一方、ポストモダン思想の影響を受けたアドリアンは、ドライカースのような自然の結末や論理的結末を多用する治療法には消極的で、目標志向的な解決構成的な治療法を好む傾向がある。その場合には、客観的状況を明らかにする必要はほとんどなく、ただ主観的解釈だけを明らかにしていけば治療が進行する。これは、信念を事実押し当ててその誤りを暴くという、いかにも実証主義的でポストモダン風でない技法を避けたいという理論的理由もあるが、解決構成的な(グランドデザイン3の)治療の方が問題除去的な(グランドデザイン2の)治療よりもクライアントの精神的負担が小さいという実践的理由もあると思う。

私はどうかというと、グランドデザイン2を選択すると決めた時を除いては、客観的状況に対する質問は最小限にとどめて、主観的解釈を聴く方向に開いた質問を続けることにしている。ポストモダン思想を全面的に受け入れた治療者たちとの違いは、彼らはクライアントの語りを操作すべきでないと言うが、私は開いた質問を中心にカウンセリングを組み立てるかぎりそれは不可能であると考えていることである。むしろ、治療者は明確に治療の方向性を意識して質問を組み

立てる責任があると私は思っている。この点で、私はポストモダン思想を全面的には受容していない。しかし、主観的解釈と客観的状況とを正対させて治療するという実証主義的な治療法には抵抗を持っているという点で、一昔前のアドレリアンよりはるかにポストモダンのである。

2. 知識の断片性

●知識は可能か

ポーキングホーンがいう知識の断片性 (fragmentariness) というのは、「共通点のない要素や出来事が相互に無関係な断片として集積しているのが現実というものであり、したがって文脈自由な一般法則を求めることはできず、局所的で特異的な出来事にかかわる知識しか得ることができない」ということである。自然科学や社会科学が「一般法則」を求めて努力してきたのに対して、「そういうものは無い」と言っているのである。

たしかに、「自分の立場こそが世界全体を説明する一般法則だ」と主張する傾向が西洋人にはあって、たとえばキリスト教、たとえばマルクス主義、たとえば人権思想が、究極の統一原理であるとみずからを考え、それ以外の思想を不寛容に迫害してきた歴史がある。ポストモダン思想家が一般法則なり統一原理なりに反発するのは、そういう歴史的経緯があるので、それはそれで理解できる。多様な思想が共存していくことが、これからの人類の課題であることは確かである。

しかし、「一般法則は存在しえない」というポストモダン思想の主張は、基底欠如性、すなわち「世界は知りえない」という主張と矛盾している。世界が知りえないのであれば、一般法則が存在するかしないかも知れないわけである。だから知識の断片性とは、たかだか、「私が知っている知識は世界すべてを説明する一般法則ではない」というほどのことでしかない。いつか人類は一般法則に到達するかもしれないが、さしあたって現在知っているものはそうではない、という程度の理解にとどめておいた方が、論理的に整合であろう。

アドラー心理学は、問題の解決を援助することと関係のない議論を退ける。そのため、たとえば精神疾患の分類に関心をもたないし、妄想や抑鬱や不安などの精神症状の発生メカニズムにも関心をもたない。しかしながら、アドラー心理学は、「一般法則は存在しえない」と主張しているわけではなく、「自分たちの目的のためには、一般法則は必要がない」と主張しているだけである。

さらに、アドレリアンは、自分たちが知っている法則、すなわちアドラー心理学、は、自分たちの目的のためには、現在の時点で知りうるかぎり、もっともよい法則であると考えている。だからこそアドレリアンなのである。目的に向かってより便利な理論とより便利でない理論がありえて、知識の間には優劣があるのである。ところが、俗流ポストモダン思想は、一般法則の存在を否定するだけでなく、法則には優劣があることを否定し、いわば「なんでもあり」の状況を肯定する傾向がある。しかし、治療という目的についていえば、アドラー心理学はフロイト心理学よりも便利であり、優れた理論である。かといって、アドラー心理学が究極の真理であるとは思わない。それはちょうど、社会生活のためには資本主義の方が社会主義よりも便利だと多くの国民が思ってそれを選択しているが、資本主義を究極の真理だとは、ほとんど誰も思っていないのと同じことである。

俗流ポストモダン思想は、法則（論理法則を含めた）そのものの存在をも否定してしまうことさえある。たとえばソーカル (Alan Sokal) とブリクモン (Jean Bricmont)^[8] は、ラカン、クリステヴァ、イリガライ、ラトゥール、ボードリヤール、ドゥルーズ、ガタリ、ヴィリリオ、リオター

ルなどのフランスの「一流の」ポストモダン思想家の著書論文が、論理的にいかにもいい加減な書き方をしてあるかを、詳細な具体例をあげて批判している。彼が引用しているそれらの思想家の文章は、難解で奥深く見えるが、実際にはまったく非論理的でナンセンスなのである。

アドラー心理学は、統一理論の構築を断念したものの、目的のために優れた理論と劣った理論があることは認めているし、もちろん論理を断念したのではない。むしろ、論理を信じて、それに従ってより優れた理論に到達しようと努力した結果の産物なのである。もちろん、そうしてできあがった自分たちの理論が、人間の心のすべてを説明する究極の原理であるとは、アドラー心理学は思っていない。

●助言について

アドラー心理学は教育的なカウンセリングを行ってきた。すなわち、治療者はあることを知っており、クライアントは無知であるから、治療者がクライアントにある知識を授けるのがカウンセリングであると考えてきた。このことに対して、ポストモダン思想の影響の強いアドレリアンから批判が出ている。

たとえばブルーダー(K. J. Bruder)^[9]は、カウンセリングは教育的(pedagogic)ではなく脱構築的(deconstructive)であるべきであるという。具体的には、クライアントのフィクションを「解消する(dissolve)」ことを目標とするのではなく「別の文脈を見つける(re-contextualize)」することを目標とすべきであるという。この違いは微妙であるように見えるが、最大の相違点は治療者が「なにも知らない態度(not-knowing-attitude)」をとるという点である。クライアントは自分の問題についてはエキスパートであり、治療者はそれについてなにも知らないので、クライアントに付き添って、クライアントが自分の私的物語を脱構築したり再構築したりするのを援助するだけであって、治療者の意見を押しつけてはならないのというのである。このようにして、治療者との対話の中で、クライアントは自分の問題を語りなおし、「いまだ語られたことのない(not-yet-told)」 「いまだ説明されたことのない(not-yet-explained)」物語を語ることによって、みずからを脱構築し再構築するのだという。

ポストモダン思想の影響の強いアドレリアンたちは、アドラーが、たとえば、「人は自分が理解している以上に自分のことを知っている」^[10]と書いていることを根拠にして、ブルーダーのような方法を支持する。しかし、文脈を離れて文を引用してはいけないので、晩年のアドラーは、「共同体感覚の使徒」となって、共同体感覚という思想を、押し売りとはまでは言わないが、「伝道」して暮らしたのだし、治療についても「共同体感覚の教育だ」と断言している。私よりはポストモダン思想への思い入れの深いオバーストとスチュワートは、「ポストモダン思想の敷居のところで、アドラーは、当時有力だった人間主義的世界観に向かって後戻りすることに決めた」^[11]と残念そうに書いているが、共同体感覚は、すくなくとも治療という目的のためには便利な考え方だということは認めるべきだし、それをクライアントに教えることが、ある場合には必要であることも認めるべきだと思う。ただ、共同体感覚は、究極の真理ではないのである。

ドライカースはしばしばアドラー以上にアドラー心理学の知識を押し売りした。ポストモダン思想の影響の強いアドレリアンは、これに反発して、ブルーダーが提唱した方法を試みつつある。私もそれを試みることがあるが、きわめてエレガントな治療法だと思う。しかし、すべてがすべてブルーダー風のポストモダン治療でなければならないとも思わない。ポストモダン風に言うと、多様な選択肢を認めるべきである。

1) クライアントの物語が治療者にとって了解可能であり(つまり妄想的でなく)、2) かつ治療目標について合意ができており、3) クライアントも治療法に合意している場合には、治療

者が自分の知識をクライアントに与えることに問題はない。ポストモダンの心理療法の強硬な提唱者であるガーゲン(Kenneth J. Gergen)とケイ(John Kaye)^[12]でさえ、こういう状態を「助言オプション(advisory option)」として認めている。

映画『時計じかけのオレンジ(A Clockwork Orange)』では、粗暴な青年犯罪者に、粗暴な行為と嫌悪感とを行動主義的な治療によって条件付ける方法が批判的に描かれている。たしかにあれは問題のある治療だと思う。治療者側の口実は、クライアントが治療に合意したことである。だから、クライアントが合意さえすればなんでもいいというわけではない。共同体感覚や、それに関連するさまざまな知識、たとえば話の聴き方や、勇気づけの方法や、家族会議の開き方などの知識、をクライアントに教えようとするとき、「共同体感覚の使徒」になってしまわない注意は必要である。共同体感覚は、宇宙の究極の原理ではなくて、たかだか目標のために便利な考え方であるにすぎないことを、忘れてはならない。

もし助言的な方法をとらない場合には、脱構築を目標とするカウンセリングをするわけであるが、脱構築というのが、クライアントが言うことを無批判にそのまま受け入れることだとは、私は思わない。現在の《語り》から《いまだ語られたことのない語り》に到達できるように、治療者は開いた質問などを用いて導いていく責任がある。そこに治療者がどの程度積極的にかかわってゆけるかについて、意見の相違がある。ブルーダーなどのようなポストモダン思想を全面的に受け入れたアドレリアンは治療者の関与を最小限にしようとするし、私やバーバラ・フェアフィールド(Barbara Fairfield)のようなミルトン・エリクソン(Milton Erickson)の影響を受けたアドレリアンは、華やかに、しかしひそやかに、さまざまな面接技術を駆使する。たしかにドライカーズやその次の世代のアドレリアンのように、決然として助言することはもうしないが、だからといって「何も知らない」治療者ではない。治療者は、すくなくとも治療の論理法則を知っている。それは、治療という限定された範囲の中でしか使えない知識であるが、確実な知識である。つまり、クライアントに語りかける「言語」のレベルでは「何も知らない治療者」であってもよいが、それらの言語をどう使いどう組み立てるかという「メタ言語」のレベルでは「賢い治療者」でなければならないと思うのである。

3. 構築主義

●科学は妄想か

構築主義(constructionism)という呼称については混乱がある。従来は構成主義(const-ruktivism)という呼称が使われることが多かったが、ガーゲン^[13]が、構成主義という呼称はピアジェ(Piaget)の認知理論などにも使われて紛らわしいので、構築主義という用語を推奨して以後は、ポストモダン思想と関係した認識論は構築主義と呼ばれるのが普通になった。ポーキングホーンはconstructivism という用語を使っているが、その内容を見ると constructionism なので、ここでは構築主義と訳しておく。ともあれ、ポーキングホーンがいう構築主義とは、「知識はリアリティの鏡像的な反映ではなく、認知プロセスによって主観的に構築されたものである」ということである。

もし基底欠如性や断片性を認めたとき、われわれの世界に関する知識はどのようにして作られるかと考えてみると、個人の主観的解釈がすなわち知識であると考えざるをえない。しかし、まったく私的な解釈では妄想にすぎないのであって、社会的に合意され共有された解釈こそが知識だといえる。極端な立場をとるポストモダン思想家は、自然科学さえ社会的に共有された妄想で

あると主張する。このような主張を社会構築主義(social constructionism)と呼ぶ。

そういうことを主張する学者に出会ったら、鼻をつまんで引っぱってやればいい。そうすれば、なにはともあれ主観的解釈も社会的合意も離れたところにリアリティが存在することを認めるだろう。それとも、鼻をつままれた痛みも妄想だと言うのだろうか。知識がリアリティの鏡像的な反映でないことは認めてもよいが、前述したように、世界は存在しないわけではないし、われわれは世界についていかなる知識も持ちえないというわけでもない。だから、明石海峡大橋は妄想の構築物ではなくて、確実にわれわれの足場となってくれるわけだ。同様に、心理学も、治療の確実な足場となりうると思う。社会構築主義に対しては、私は概して批判的である。

●診断について

精神医学診断名が社会的構築物であり、差別のためのレッテルであるという議論は古くからあった。アドラー心理学は診断名を重視しないのでその点では問題がないが、たとえば「共同体感覚を欠いたライフスタイル」とか「ライフスタイルの基本的誤り(basic mistakes)」というような言い方はどうだろうか。共同体感覚は、客観的真理ではなく、主観的信念であるにすぎない。それが社会的に構築された思想、あるいは社会的に共有された妄想、であると言われれば、それはそうかもしれない。それを尺度にして、クライアントのライフスタイルを「健康である」だの「病的である」だのと診断するのは、精神医学診断名と同じように、社会の側から個人を裁いていると言われてもしかたがないかもしれない。

ポストモダン思想に共鳴しているが社会構築主義にはそれほど好意的ではないように思えるオバーストとスチュワートでさえ、シャルマン(Bernard H. Shulman)が、クライアントの「誤った信念」を探し出して、それを「適切な信念」に修正するという考え方を、「まるで学校にいる子どものように、クライアントは教えられ教育されるべきだということだ」^[14]と言って、教科書の記述とは思えないほど毒々しく批判している。たまたまシャルマンがやり玉に挙げられているが、このやり方はドライカースと彼の生徒たち全員に共通する治療法だ。つまり、アドラー心理学の第2世代と第3世代全員を、第4世代のオバーストとスチュワートは批判しているわけであるが、これが2000年代のアメリカのアドラー心理学の縮図である。

私も第4世代であるので、この批判は正当であると思う。それで、「あなたのライフスタイルには、ここにこういう間違いがありますね」という話し方はやめることにして、「あなたのライフスタイルには、どういう間違いがあると思いますか？」と質問型でクライアントに問いかけることにしている。もし、私から見てライフスタイル上の問題をかかえていそうなクライアントが、「私のライフスタイルにはいかなる間違いもありません」と主張したとしても、それは受け入れる覚悟でいる。そんなことがおこるのは、それまでの私の質問の組み立て方に問題があったのであって、クライアントの性格に問題があるからではないと思うからである。クライアントがみずから《語りなおす》ように援助することが、ライフスタイル分析の現代的な意味だと、私は考えているし、誠実に語りなおせば、きっと人はみずからの誤りに気がつくものだと思っている。そうならないのは、クライアントがみずからを誠実に語りなおせるような援助を、治療者がしていないからだ。よい治療関係の中で、よい質問の系列があれば、きっとクライアントはみずからを誠実に語りなおし、みずからの過ちに気がつくであろう。私がメタ言語レベルで「賢い治療者」であれば、言語レベルでクライアントを教えさす必要はないと思うのである。アドラーも言うように、クライアントはみずからをよく知っている。

さらに、最近私は、「私が」クライアントのライフスタイルを分析するのをやめて、「クライアントが」みずからのライフスタイルを自力で分析できるよう援助するようにしている。早期回想

などを話題にする中で、クライアントがライフスタイルをみずから発見できるように援助するのであって、治療者が診断してそれをクライアントに伝えることはしない。具体的には、「その思い出のなかで、あなたはどんな人ですか？ 人々はどんな人たちですか？ 人生とはどんなものですか？」というような質問を重ねることで、クライアントが自力でライフスタイルを分析できるように援助する。ここでも、言語レベルでは「何も知らない治療者」、メタ言語レベルでは「賢い治療者」であろうとしている。

モザク (Harold H. Mozak) が提唱したような信念体系 (conviction system) としてのライフスタイルという考え方は、ポストモダン思想に共感を覚えるアドレリアンから批判され始めている。さすがにアドラー心理学内部ではモザクの理論に対する正面切った批判はまだ見られないようであるが、モザクときわめて類似した性格理論を提唱している認知療法のベック (Aaron Beck) に対して、マホーニー (Michael J. Mahoney)^[15] が、客観主義的であると批判している。すなわち、クライアントの話から自己概念だけの自己理想だけを見つけ出すのは、腹部を切開して肝臓を見つけ出すのとは話が違うので、肝臓であれば、一定の手続きを経れば、その存在を人々の間で客観的に合意することができるが、ライフスタイルについては客観的な合意の方法がない。肝臓の存在は鼻をつままれた痛みと同じ程度に実在するが、ライフスタイルは虹や陽炎のようにしか存在しないかもしれない。それを、モザクは、ライフスタイルが肝臓であるかのように、あまりにも客観主義的に語りすぎていると私も思う。

ライフスタイルについての考察はまだ不十分であるので最終結論ではないが、目下のところ、ライフスタイルは、クライアントが早期回想などの話題について語る中で、みずから《発見》するものかもしれないと思っている。《発見》するのではないかもしれないのである。ライフスタイル診断前のライフスタイルについては、存在しないとは思わないが、どのようなか知ることがない。ライフスタイル診断後のライフスタイルは、治療操作によって社会的に構築されたものであり、客観的な実在ではないかもしれない。外科医と患者が話し合っても肝臓がどんな形か決めることができるとは思わないが、心理療法家とクライアントは話し合うことでライフスタイルの形を決めることはできるのかもしれない。これについては、学者の間でも諸説あり、モザクに近い客観主義的な立場をとる人から、社会構築主義に近い恒常的なライフスタイルの存在を認めない人まで、広いスペクトラムがある。私は、どのあたりに自分の位置を定めるかまだ決めきれていないのだが、すくなくともモザクのような客観主義的な立場はとらない。

4. ネオ・プラグマティズム

●倫理は可能か

ポーキングホーンがいうネオ・プラグマティズムとは、「知識の有効性についての唯一の基準は目標に到達するために有益であるか否かだけであって、リアリティと対応しているかどうかではない」ということである。

この考え方には大きな問題がある。たとえば、認知症になった母が財産を独占していて使わせようとせず、子どもたちが困っているとす。このとき、その母を殺すことは、プラグマティックに見れば善かもしれない。なぜなら、子どもたちにとっては有益であるし、社会的に見ても、法的問題を度外視すれば、かならずしも有害だというわけではないかもしれない。実際、そのように主張するポストモダン思想家がいそうに思う。しかし、この『罪と罰』風の思考様式は、どう考えても倫理的でないと思う。

ポストモダン思想に共感するアドレリアンたちも、ネオ・プラグマティズムを倫理の基盤とすることは抵抗を持つようで、代わりに共同体感覚を持ち出す。しかし、もし共同体感覚というのが、「目標を達成するために便利な考え方」だということであれば、それもまたネオ・プラグマティズムであり、倫理的相対主義でしかない。そこで、共同体感覚についてもうすこし考えておく必要がある。

● 共同体感覚

本論でも、これまでは、共同体感覚を、目標を達成するために便利なフィクションだと述べてきた。公的には実際そのように思っているが、私的には、しかし、そうは考えていない。共同体感覚はスピリチュアルな概念だと思っている。

レヴィナス(Emmanuel Levinas)は、「他者のために、他者の代わりに死ぬ」^[16]責任が私にある、と言う。「死ぬ」というのは極限的な表現であって、日常的には、「自分の利害を棚上げして、まず他者に貢献する」という意味である。アドラーが言う共同体感覚にきわめて近いことをレヴィナスは言っていると思う。しかし、いくつかの決定的な違いがある。

まず、レヴィナスが言う《他者》は、目の前にいる一人の人であって、複数の「人々」ではない。「全員という言葉が口にされたとたんすべてが変わってしまうからです。その場合には、もう他人はかけがえのないものではなくなります」^[17]と彼は言う。こういう考え方を、私は「ミクロの共同体感覚」と呼んだことがある。すなわち、「共同体に対して有益な行動を選択せよ」という場合の「共同体」を、「目の前の他者」に限定した考え方である。「人々」を愛するのはたやすいが、目の前にいる認知症になった母親を愛するのは難しいかもしれない。

さらにレヴィナスは、複数の人々を同時に愛そうとすると、どの人を優先して選択するか、どの人を後回しにするかという、選択や、評価の問題が出てきて、結局「裁き」を必要とすることになり、裁きの根拠としての法律や、法律を施行する国家が必要となり、国家は必然的に暴力装置であるので、複数の人々を同時に愛そうとすることはすなわち「始原的暴力」にほかならないと言う。これは極論であるにしても、まずさしあたって目の前の他者に貢献する覚悟を決めなければ、人々の話、共同体の話はできないと、私は思う。

もちろん、共同体感覚を制度として人々に強要するようなこともできない。たとえば、スターリン主義を例に挙げて、レヴィナスは次のように言う。

スターリン主義とはつまり、個人的な慈悲なしでも私たちはやっつけていけるという考え方なのです。慈悲の実践にはある種の個人的創意が必要ですが、そんなものはなくてもすませられるという考え方なのです。そのつどの個人的な慈愛や愛情の行為を通じてしか実現できないものを、永続的に、法律によって確実なものにすることが可能であるとする考え方なのです。スターリン主義はすばらしい意図から出発しましたが、管理の泥沼で溺れてしまいました。管理の暴力です！

[18]

日本の戦前の政治制度もこのようなところがあったと思う。善意を制度化して国民に強制することで、かえって暴力的な国家を作り上げてしまった。

このように考えると、「共同体感覚の教育をする」ということは、よほど注意しないと危険な行為であることがわかる。共同体感覚は、ひたすら個人の課題であって、自分に向かって「私は共同体感覚が不足している」と言うことはできるが、人に向かって「あなたは共同体感覚が不足している」と言うことはできない。まして、広く人々に向かって、「共同体感覚を持ちましょう」

と呼びかけることなどできない。それはスピリチュアルな概念であって、伝道的な概念ではないのである。「他なるものの苦しみと死を、自分自身の死を気遣うより先に気遣うということ」^[19]という私的な決心である。それは他人に強要できないことであり、みずからがひそかに選択するしかないことである。逃げようのないひとりの「私」が、かけがえのないひとりの「あなた」に向かって、「あなたの苦しみを私が背負います」ということである。だから先ほど、共同体感覚は公的にはネオ・プラグマティックなフィクションであるが、私的にはスピリチュアルな概念だと言ったのだ。人々に私と同じように共同体感覚をとらえるように強制することはできない。

しかもなお、それを人々に伝えていかなければならない。そこで私は、グループ療法を好むようになった。そこでは「他なるものの苦しみを、自分自身の苦しみを気遣うより先に気遣う」状況が準備できるからである。目標追求と共同体感覚が矛盾対立するというのは、フロイト的な要素論の名残であり、さらに言えばデカルト以来の西洋近代思想の迷信だと思う。アンズバッハー(Heinz L. Ansbacher)^[20]が言うように、「全体論的理論として、アドラー心理学は個人と社会との間の基本的な協力的調和を前提にしているのであって、葛藤は誤った状況によってひき起こされるものであるにすぎない」のだと私は考える。逆に言うと、適切な状況さえ与えられれば、人は必ず善なる目的に向かって行為するのだと考えることにしている。よい治療状況の中では、誰に強制されることもなく、人はみずから共同体感覚(それもスピリチュアルな意味での)を選びとるのだ。治療的楽観主義と言われるかもしれないが、そう信じて暮らしたい。

ここでは、私は、教育的でなく脱構築的であるという点でポストモダン的であるが、共同体感覚がネオ・プラグマティックな相対的価値ではなくてスピリチュアルな超越的価値であると考えている点で、ポストモダン思想に反対している。認識論的な相対主義には長所があると認めているが、倫理的な相対主義には問題があると思っているわけだ。

5. まとめ

仏教学者佐々木閑が次のような話をしている。

最近脳科学が過大評価されて、「すべての科学理論は、社会状況に応じて脳が作り上げる仮想の体系だ」と主張する人たちもいるが、それは違う。外界からの情報は確実な実在であり、それをもとに、脳が人間独自の解釈法で作りに上げるのが科学理論なのである。喩えて言うなら、脳は料理人である。外部から与えられた特定の食材を自分の技とセンスで調理し、独自の料理に仕上げ、食卓に出す料理人だと思えばよい。(中略)料理人がどれほど見事な腕前の持ち主であったとしても、食材がなければなにも作ることはできない。外部世界という食材を、人間の脳という料理人が調理して、科学という人間固有の料理が生み出される。^[21]

これは健全な認識であると思う。リアリティの存在については、「かっこ入れ」してもよいが、否認すべきではない。それが私の現在の立場である。

ポストモダン思想が、次の時代を開くのか、あるいはひとときの流行でやがて忘れられてゆくのか、私にはわからない。しかし、客観主義の時代の、出てきたものがそのまま素材だと思っていた時代から、認知機構という料理人の手が加わっているものだとわかったのは進歩だったと思う。さらに、語り合うという操作を通じて、他者の認知機構に影響を与える方法がわかってきたのもポストモダン思想(ベイトソンやミルトン・エリクソンを含めていいならの話だが)の貢献で、心理療法家にとってはありがたいことだと思う。だからこそ倫理基準についてもっと敏感に

ならなければならないことを警告してくれたのも、ポストモダン思想（レヴィナスを含めていいならの話だが）の功績だ。

ドライカースやシャルマンやモザクの実証主義的なアドラー心理学解釈にこだわっている必要はない。かといって、極度にポストモダンな、「何も教えない」治療に与するのも賢明でないと思う。極右と極左の中間のどこかに自分の位置を決めて、クライアントにとってもっとも有益だと自分なりに思う治療を展開していくべきだと思う。ともあれ、第4世代、第5世代のアドレリアンにとっては、多様な可能性が開かれているのである。

文献

- [1] ジャン＝フランソワ・リオタール著，小林康夫訳：ポスト・モダンの条件．水声社，1989.
- [2] *The Journal of Individual Psychology*, 54(4), 1998.
- [3] Watts, R.E. : *Adlerian, Cognitive, and Constructivist Therapies*. Springer, New York, 2003.
- [4] Oberst, U.E. and Stewart, A.E. : *Adlerian Psychotherapy*. Brunner-Rotledge, New York, 2003.
- [5] Polkinghorne, D.E. : Postmodern Epistemology of Practice, in S. Kvale (ed.):*Psychology and Postmodernism*. Sage, London, 1992.
- [6] Bazzano, M. : Who is the Other? (野田俊作訳：他者とは誰か？ アドレリアン, 20(1):17-26, 2006.)
- [7] 野田俊作：アドレリアン・セラピーとは何か？ アドレリアン, 20(1):9-16, 2006.
- [8] アラン・ソーカル，ジャン・ブリクモン著，田崎晴明，大野克嗣，堀茂樹訳：「知」の欺瞞—ポストモダン思想における科学の濫用，岩波書店，2000.
- [9] Bruder, K.J. : Die Erfindung der Biographie im therapeutischen Gespräch.. *Zeitschrift für Individualpsychologie*, 21:313-324, 1996.
- [10] Adler, A. : *Der Sinn des Lebens*. Fischer, Frankfurt a. M., 1933/1980, p.22.
- [11] 前掲文献[4], p.163.
- [12] Gergen, K.J. and Kaye, J. : Beyond Narrative in Negotiation of Meaning, in S. McNamee and K.J. Gergen (eds.): *Therapy as Social Construction*. Sage, London, 1992.
- [13] Gergen, K.J. : The Social Constructionist Movement in Modern Psychology. *American Psychologist*, 40:266-275, 1985.
- [14] 前掲文献[4], p.156.
- [15] Mahoney, M. J. and Gabriel, T. : Psychotherapy and the Cognitive Sciences: An Evolving Alliance. *Journal of Cognitive Psychotherapy*, 1:39-59, 1987.
- [16] エマニュエル・レヴィナス著，合田正人・松丸和弘訳：他性と超越．法政大学出版局，2001, p.142.
- [17] エマニュエル・レヴィナス，フランソワ・ポワリエ著，内田樹訳：暴力と聖性．国文社，1991, p.126.
- [18] 前掲文献[15], p.128.
- [19] 前掲文献[15], p.118.
- [20] Ansbacher, H. L. and Ansbacher, R. R. eds., Adler, A. : *Superiority and Social Interest*. Norton, New York, 1964, p.29.
- [21] 佐々木閑：犀の角たち．大蔵出版，2006, pp.158-159.

更新履歴

2013年2月1日 アドレリアン掲載号より転載